# 『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）

# 第二相「砕け」

## ――第二部　人間の福音的実存七相――

２０２３年２月26日
弘野慶次郎

砕けたる悪人　砕けざる悪人　砕けた心魂　取税人の砕けた心　キリストの砕け

●砕けたる悪人

「人間の福音的実存七相」の第二相「砕け」の「悪人の悲願」（ルカ23・39～43）という題の「砕けたる悪人」という中見出しのところ（197頁）から読んでいきます。

**《砕けたる悪人**

十字架の極刑を受けるほどの悪業をした二人の悪人の中、一人は傲然としてイエスを譏(そし)ったが、他の一人はイエスにこういった。

**「イエスよ、御国にお入りなさるとき、（現行訳、「み国の権威をもっておいでになるとき」）こんな奴ですが、憶えてください！」（私訳）**

惨憺たる人生を送ったこの者が、いまわのきわに十字架の苦しみのどん底から発した全的に砕けた心の悲願、血の切願であった。孤独と絶望！　悔恨と悲嘆！　地獄の劫火が待っている終末的一瞬。地獄の鬼が堕ちゆくおのれを呑みこまんと口を開け歯をむき出しているおそろしい光景が目にちらついたでもあろう。

しかし、イエスはこの悪人の断末魔の一言をハタと受けとめた。彼は何と答えたか。

**「私は本当にお前に言う、今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」（ルカ23・43私訳）**

地獄ゆきの下降のからだが、忽然として天国ゆきの上昇のからだとなった。地獄の鬼の口は徒らに空いていた。この悪人は誰よりもさきにイエスと共に天界に突入した。

キリストの福音はいかなる人をも、たましいが砕けて立ち還るならば、無条件に救いあげる。善人とか悪人とかいう差別がどこにあるか。誰でも救いを要する人間ではないか。神の前に誰が、自分は正しいとか善いとか清いとかいって立ち得るか。神の聖法に即していると誰が揚言できよう。この「十字架の悪人」のように、

「こんな奴ですが、せめて憶えてください」

といってすがるほかに言があろうか。

十字架上のイエスのこの言以上に慰め深い言はない。地獄ゆきが天国ゆきに一変す

る歓喜以上の歓喜が世の中にあろうか。地上のどんな歓びも、パラダイスに迎えられる歓びにまさるものはない。然り、日々是天国であらんがために、ただ砕けの魂で生涯を貫いてゆきたいのみである。

**「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」**

このようにキリストから呼びかけられつつ、毎日毎日を歩くにまさる生活があろうか。人生の暗雲、風雨、酷暑寒冷、いかなる現実にもめげず、春の野を往くが如しである。そういう悲願霊願で、このキリストの本願に助けられつつ進んで往こう。》

一番最後のところです。これは小池辰雄が自分の墓碑に彫りたいと言っていた言葉ですね。小池先生の墓碑にこの言葉が刻まれているはずです。

〔註：墓石にはただ「ＰＡＲＡＤＩＳＯ」（パラダイス）と刻まれている〕

**「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」**

という。小池辰雄はこれをよほど深く受けとったのだと思う。小池辰雄が受けとったイエスからの十字架の深さはここにある。

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」このようにキリストから呼びかけられつつ、毎日毎日を歩くにまさる生活があろうか。」

と言っている。小池辰雄はいろいろと言われますけれども、小池辰雄のキリストの十字架の受けとり方はこんなところにある。すごく深く受けとった。そうでないと、墓碑なんかに書きたいと思いません。どれだけ世の中が暗くても、

「人生の暗雲、風雨、酷暑寒冷、いかなる現実にもめげず、春の野を往くが如しである。」

という。小池辰雄は毎日毎日、春の野を歩いていくような、そういう感じでおられたのだろうと思います。

「そういう悲願霊願で、

「悲願」というのは人間からの願いです。「霊願」というのは神さまの方からの願い。人間の願いと神さまからの願いが一致して、

このキリストの本願に助けられつつ進んで往こう。」

ということを言う。

「砕けたる悪人」というのは、十字架上に死刑になった悪人。中心にイエスが居られて、その左右に二つの十字架に付けられた。一方の悪人は非常に傲慢であって、

**「お前は神の子なら俺を助けろ！」**

と傲慢に言うわけです。もう一方の悪人というのがここに書いてある者で、

**「せめて、あなたが御国にお入りになるときに、こんな私ですけれども、覚えてください」**

と、たった一言それを言う。そしたら、

「イエスはこの悪人の断末魔の一言をハタと受けとめた。」

という。十字架にかかっている人はもの凄く苦しいんですよ。もの凄く苦しいはずなのに、そう言われたら、その方に向かって、

「お前は今日、私と一緒に天国だ！」

と言うわけです。この悪人も苦しいと思うんですよ、「断末魔」の苦しみと書いてあるけれども、イエスももの凄く苦しいはずなんですよ、十字架にかけられて。それなのに、その一言を受けとって、

「おまえは今日、私と一緒にパラダイスだ！」

というようなことを言えるイエスが凄いですよね。あれも凄いですし、それを受けとった小池辰雄も凄いですね。

「聖書というのは、客観的に見ているものではない。その中にドラマとして入り込むんですよ」

というようなことを非常に如実に小池辰雄は言うわけです。これは、自分がやはり一人の悪人の姿として、ここに生まれているということですね。そのドラマの中に入り込んでいるというのは、小池辰雄はこの記事を見て、自分もその中に入り込んでいる。その悪人と一緒に小池辰雄も思っている。よほど小池辰雄というのはこの十字架をもの凄くはっきりと深く深く受けとっていたと思う。この悪人のことをここでこう書いている。

「惨愴たる人生を送ったこの者が、いまわのきわに十字架の苦しみのどん底から発した全的に砕けた心の悲願、血の切願であった。」

と。「血の切願」と書いている。こういう言葉を書く人はおるでしょうかね。小池先生でないと、こういう言葉は出てこないと思います。

「全的に砕けた心の悲願、血の切願」

と書いている。その悪人はもの凄い苦しみの中でそういうふうに願ったわけです。そして悪人のことを書いてます。

「孤独と絶望！　悔恨と悲嘆！

もの凄く孤独だったんですね、もう死ぬだけだから、絶望の極みです。どん底の人だったと思う。「悔恨と悲嘆」と書いてあります。そして、

地獄の劫火が待っている終末的一瞬。地獄の鬼が堕ちゆくおのれを呑みこまんと口を開け歯をむき出しているおそろしい光景が目にちらついたでもあろう。」

と。もう本当に絶望的だったんでしょうね。その時に同じ所で処刑されて、イエスに

「こんな奴ですが、せめても覚えておいてください」

と一言いったんですね。それが本当に

「断末魔の一言」

で、口から出た言葉だと思う。その魂をイエスは必ずハタと受けとられる。もういまわの際ですよ、キリストにしても。それを無条件に、

「私はお前と一緒にパラダイスだ！」

と言うわけです。これを小池辰雄が受けとったというのは、やはり凄いことだなと思う。僕はそういうところまでいきませんけれども、やはり小池辰雄の十字架の受けとり方が凄いなと思いますね。いつも小池辰雄が、

「一番初めにパラダイスに入った者はこの悪人だよ」

と言う。

「この悪人は誰よりもさきにイエスと共に天界に突入した。」

と書いてます。その他の弟子とか、その他の者ではない。この人は弟子ではなかったですよ。だけれども、弟子でない、この悪人の悲願というか、その願いというのは必死な願いだったんですね。それをイエスは受けとられたから、

「一番先に天国に入ったのはこの悪人だよ」

ということを小池辰雄は何回も言ってました。僕はいろんな所で聞いてますけれども、

「この悪人は誰よりもさきにイエスと共に天界に入った」

ということを言うんですね。

「キリストの福音はいかなる人をも、たましいが砕けて立ち還るならば、無条件に救いあげる。善人とか悪人とかいう差別がどこにあるか。

これは善人、悪人は関係ない。その時の悪人の一言、その瞬間をキリストは受けとっておられるんです。

誰でも救いを要する人間ではないか。

「万人が救いを要する」と小池辰雄は言う。

神の前に誰が、自分は正しいとか善いとか清いとかいって立ち得るか。神の聖法に即しているると誰が揚言できよう。」

神さまの前では絶対的に自分が正しいなんて言えるわけがないということをここで小池辰雄は言うわけです。僕はここを読んでいて、小池辰雄の十字架の受けとり方はやはり深いなと感じます。何回もそれを思いますね。

## ●砕けざる悪人

ちょっと戻りまして、196頁の4行目から読んでみます。

《してみると、この両側の十字架の二人の男において、人間の二つの相が歴然と顕れている。一方は、畏るべき者を畏れぬ傲慢な人間の相（すがた）。他方は、畏るべき者の前に平伏している謙虚な人間の相。人間の善悪、賢愚、強弱、美醜、といった相異は相対的なものであるが、絶対者に対して魂が砕けるか、砕けないかは、人類を二分する根源的な、次元的な、決定的な相異である。信、不信をわかつものは、魂が砕けるか、砕けないかにかかっている。神を信ずるとは、神のまえに魂が砕けるとき、はじめてい

い得ることなのである。そのようなわけで、キリストの十字架の両側の二つの十字架の男において人類を二分する明確な質的相違が顕然とあらわれた。この二相は人類の歴史の終末までつづく。

この二人が、殺人、姦淫、窃盗、偽証、どのような罪を犯したにせよ、その種類、軽重が問題なのではない。多くの人は法律上の犯罪者ではない。しかし、いわゆる法的な犯罪者でなくとも、いかに多様の犯罪的行為が人間社会には混在していることであろう。人間社会の悪業は、昔の封建社会においては勿論のこと、法治国においても権力、徒党、地位、財力、腕力、その他さまざまな手だてをもって行われている。矛盾、不合理、不正、不義、無秩序、勝手気まま、だまし、あざむき、ねたみ、あらそい、等々、この世は態のいい地獄といってもいいだろう。あきらかにいつわりの平和である。どう見ても救を要する。

救を要しない人間はどこにもいないはずである。だから万人は宗教に最も深い関わりをもっているわけなのである。それを宗教は最も縁遠いこととして無関心でいるのが現状ではないか。逆に言えばそれだけ救を要するのである。》

小池辰雄は、

「人類を二分するのは、砕けるか砕けないかということです」

と言う。およそこういう、人間を二分する方法はないですよ。「善い人か、悪い人か」とか、そういう分類はしますけれども、人間は知らないあいだに。

「この両側の十字架の二人の男において、人間の二つの相が歴然と顕れている。これは象徴的なことを言っている。キリストの十字架を中心に、一人は善人、一人は悪人のような形で書かれています。

一方は、畏るべき者を畏れぬ傲慢な人間の相（すがた）。

これが大部分ですね。

他方は、畏るべき者の前に平伏している謙虚な人間の相。人間の善悪、賢愚、強弱、美醜、といった相異は相対的なものであるが、

そういうものは問題でないという。

「善いとか悪いとか、強いとか弱いとか」

みんないろんなことを言って、人を差別したり何かしているけれども、そんなことは問題でない。

絶対者に対して、魂が砕けるか、砕けないかは、人類を二分する根源的な、次元的な、決定的な相異である。」

それは

「魂が砕けているか砕けてないかということだけだ」

と言う。これもやっぱり小池にとってはもの凄く深い人間洞察だと思う。

人間をどんなふうに分類するかというようなことはいろいろありますよ。

「賢いとか賢くないとか、美しいとか美しくないとか」

俳優さんなんかは美しいですよね、だからそういう仕事をしているんですけれども。

「それは全部相対的なものですよ」

と小池は言う。

「人類を二分する根源的な、次元的な、決定的な相異である」

という。

「それは神さまからの目から見たら絶対的な判断ですよ、魂が砕けるか砕けないかということだけですよ」

と言っている。

「魂が砕けるか、砕けないかは、人類を二分する……決定的な相異である」

と。こんなことをはっきり言っている人がおるか、僕はよく知らない。小池辰雄しか言ってないと思いますよ。

「人類を二分するのは、魂が砕けているか砕けていないか」

これは神さまの前に、魂が砕けているか砕けていないかということ。

「神を信ずるとは、神のまえに魂が砕けるとき、はじめていい得ることなのである。」

と。よく「信仰、信仰」といいますね。けれども、

「その信仰は表面的な信仰ではない。本当の信仰というのは、神の前に魂が砕けるとき初めて本当の信仰だ」

と言うことができるという。

「神を信ずるとは、神のまえに魂が砕けるとき、はじめて信仰といい得ることができる」

ということです。「信仰」という言葉を聞くと、そういう言葉が我々の頭をかすめていきますよ。小池が言う「信仰」というのは、

「魂が砕けているか砕けていないか。砕けて初めて、それは信仰と言える」

ということ。

だから、小池辰雄はよく言ってますよ、

「キリストのキの字も知らない人でも、魂が砕けていれば、キリストの所へ行きますよ」

という。そういうことを小池は他のところで言ってます。

「そのようなわけで、キリストの十字架の両側の二つの十字架の男において人類を二分する明確な質的相違が顕然とあらわれた。この二相は人類の歴史の終末までつづく。」

キリストが来られる前からそうですね。人類の終末まで、やはり

「魂が砕けるか、砕けないか」

によって二分される。神さまの審判の時に、

「山羊か羊かに分けられる」

というような記事がありましたね。要するに、

「砕けた魂か、砕けていない魂か、に分けられますよ」

と言う。これはもの凄く、小池の達観した、卓越した考えだと僕は思う。小池辰雄が十字架を受けとった経験からこれを言っている。

人間がよく、人を見るとき、善悪とかいうことで見るでしょ。それをここで書いている。

「この二人が、殺人、姦淫、窃盗、偽証、どのような罪を犯したにせよ、その種類、軽重が問題なのではない。」

絶対的なものではない。

「私はあの人よりましだ。ちょっとだけましだ、比べたら」

とか思うとしたら、

「そんなのはちがう。神さまの前では絶対にそんなことは通じないんですよ」

ということを言っている。

「多くの人は法律上の犯罪者ではない。しかし、いわゆる法的な犯罪者でなくとも、いかに多様の犯罪的行為が人間社会には混在していることであろう。人間社会の悪業は、昔の封建社会においては勿論のこと、法治国においても権力、徒党、地位、財力、腕力、その他さまざまな手だてをもって行われている。」

本当にその通りです。戦争を見てもそうです。いわゆる会社なんかのエリートの人でも、よく誤魔化すでしょ。誤魔化している人は立派な社会人ですよ、立派な大学を出て、エリートコースを行って、それが悪いことをする。そういうご連中がおるでしょ。

「矛盾、不合理、不正、不義、無秩序、勝手気まま、だまし、あざむき、ねたみ、あらそい、等々、この世は態のいい地獄といってもいいだろう。」

と言っている。そういうことを踏まえた上で、

「救を要しない人間はどこにもいない」

と、ここで結論するんです。

「あきらかにいつわりの平和である。どう見ても救を要する。救を要しない人間はどこにもいないはずである。」

立派な人でもそんな悪いことをするわけだから、本当に小池辰雄が言うように、

「人間を二分するものは、神さまの前で魂が砕けているか砕けていないか、それだけですよ」

と言う。砕けない人というのが圧倒的に多いから、神さまは悩まれるはずですよね。けれども、ここに最後に書いてますよ、

「だから万人は宗教に最も深い関わりをもっているわけなのである。それを宗教は最も

縁遠いこととして無関心でいるのが現状ではないか。」

この無関心が一番多いんですよ。神さまやキリストに対する無関心はもの凄く多い。無関心なんです、皆さん。僕の兄弟でも無関心ですよ。僕はキリスト教になりましたけれども。もう他の人は無関心なんです。大多数の人が無関心です。

僕は他の教会に行ったりして、復活祭に卵なんかをもらうんですよ。

〔註：イースター・エッグ（Easter egg、復活祭の卵）とは復活祭の休日もしくは春を祝うための特別に飾り付けられた鶏卵のこと〕

「このきれいな卵を皆にあげたら喜ぶやろな」

と思って、そういう意味で皆に分けるんですよ、もらってきた卵を。でも、無関心ですよ、みな。

「これはきれいだな」

と思います。百人のうちの一人でも、これをもらった人がまた、

「教会へ行ってみようかな」

と思ってくれたら、しめたものだと思って、僕は復活祭でもらってきた卵をあげるんです。そうすると、

「百人のうち一人ぐらいは気付いてくれるかな」

と思うんです。でも、大体が無関心です。日本に限らず、全世界の人が無関心です。

## ●砕けた心魂

それで、375頁にとびまして、「砕けた心魂」のところを読みます。

**《砕けた心魂**

**「至高く至上なる永遠に住める者、聖者と名づくる者、かく言い給う、我は高き所、聖き所に住み、また心砕けて謙る者と共に住み、謙る者の霊を活かし、砕けたる者の心を活かす」（イザヤ57・15）**

これが福音というものである。神なる聖者がただ高所に超絶していたのでは、我々罪びとはどうしようもない。人間の在り方で大切なのは、自ら立派になろうとすることではなく、この聖者に降参し、平伏し、心砕けてあることだけである。聖者たる神が自らこのどうしようもない者の中に降りて来て、その霊を活かし、その心を活かし給うというのである。宗教の消息はそういうところにある。これは万人にとって無条件に可能なことである。何の資格も、素質も、才能も要らない。ただつぶれはてた霊、八方破れの心だけである。そこに神仏が宿る。》

ここは小池辰雄の「宗教と文化」（第三部「無的実存」／第五章「宗教と文化」）というところで、砕けた魂の様子を繰り返し言っているんですが、イザヤ書57章15節を引用して、

「至高い所に住んでいるだけではなくて、心砕けて謙る者と共に住み、謙る者の霊

を活かし、砕けたる者の心を活かす」
と。それを引用して、
「これが福音ですよ」
ということを言っている。イザヤ書は旧約聖書ですから、このときはまだキリストは居られませんよ。そのときに預言としてこういう言葉が残っている。
「神さまは高い所に住んでいるだけではない。心砕けて謙る者のところに一緒に住む。それが福音というものである」
ということを言っている。イザヤなんかは知らずに預言していると思うけれども、キリストが来られて初めて、福音というものがイザヤ書57章15節に預言されていたということなんです。そのあとに、
「人間の在り方で大切なのは、自ら立派になろうとすることではなく、自分で立派になろうとするのではないんですよということ。
この聖者に降参し、平伏し、心砕けてあることだけである。
そんな立派になろうとする必要は全然ないんですよ、神さまの前に心砕けてさえすればいいんですよということです。
聖者たる神が自らこのどうしようもない者の中に、
「このどうしようもない者の中に」というのは小池の意識ですよ。辰雄は自分を「どうしようもない者」と思っているんでしょ。決して人間的に立派というものが小池辰雄ではない。
どうしようもない者の中に降りて来て、その霊を活かし、その心を活かし給うというのである。宗教の消息はそういうところにある。これは万人にとって無条件に可能なことである。
「誰にとってもこれは可能です、偉いから神さまは宿るものではないんですよ」ということを言う。
何の資格も、素質も、才能も要らない。
無条件に可能なんです、
ただつぶれはてた霊、八方破れの心だけである。そこに神仏が宿る。」
と言っている。
「キリスト教は何か立派そうに見える」
とか、
「教会は何かつんとしているから行きたくない」
とか、そんな人もいますよ。けれども、本当はそうではない。もうグチャグチャの人の中に神さまは宿るんだという。さっきの悪人のことです。
「あの人が殺人を犯したとか、何を犯したとか、そんなのは問題ではないよ」
と。その時に心が砕けたから、イエスがそれをハタと受けとって、

**「お前は今日、私と一緒に天国だ！」**

という言葉を発しているわけでしょ。それだから、その恰好なんかはどうでもいい。その魂が砕けた瞬間に、神さまと一緒に天国に入ってしまうんですよと。

「そこに神仏が宿る」

と書いてあるでしょ。イザヤ書57章15節を引用して、

「これが福音である」

と。そして、

「八方破れの破れた魂の中に神仏が宿る」

と。宿るんですよ。僕らは、自分で何かキリスト者になったような顔しているかも知れないけれども、そうじゃないんです。砕けの魂の中に自ずと神さまが入ってくるんです。それを小池が言っているわけでしょ、

「神仏がそういう魂の中に宿るんですよ」

と。もう上から降るということだけです。自分の方から

「信仰があるとかないとか」

そういうことではない。そういうことをこの「宗教と文化」というところで小池が、

「砕けた心魂」

ということを言っている。それでここをちょっと読みました。

クリスマス、降誕節ですね。上から降りてくるということ。決して自分の方からではないということです。

## ●取税人の砕けた心

それで、187頁をみます。「第二相　砕け」、「取税人の祈り」（ルカ18・9～14）の「パリサイ人の祈り」のところです。これは、神殿に来てお祈りをする。罪びととされている取税人が、

「神さま、私を憐れんでください」

というふうに言う。もう一方の人はパリサイ人であって、

「自分はこの取税人みたいな悪いことをしていない」

と言って祈るという、そういう記事が出ている。ここは皆さんはよく御存知のところです。「取税人の祈り」というルカ伝18章に出ている記事ですけれども、それを省いて、192頁の後から2行目の所から読みます。

**《取税人の砕けた心**

……人間は誰の胸にも自己義認的パリサイ根性もあり、利己的な守銭奴的取税人根性もある。その他もろもろの罪の衝動が混在している。要するに自我という慾心が罪で、この自我が砕けるか砕けないかにおいて、人類は最も根本的に二分されると思う。

人種的差別、民族の相異、国家国籍のちがい、社会層の差異、主義、主張、思想、

イデオロギーの対立、そういうものが天国か地獄かの相異にはならない。人間を本質的に天国か地獄かに分かつものは、その他、強弱でもなければ、貧富でもない。賢愚でもなければ、能不能でもない。美醜でもなければ、義不義でもない。聖俗、清濁でもなく、善悪ですらもない。その人のたましいが砕けるか砕けないかだけである。

もっともらしい祈りをもって自己義認をした偽善者パリサイびとは義とされず、却て、

「神様、あわれんでください、この罪びと私を」

と平伏しのたましいとなって叫んだ取税人が

「義とされて（デディカイオーメノス）自分の家にくだっていった」

とイエスははっきりと言った。

砕けざる義人（偽善者）パリサイ人は地獄ゆきとなり、砕けたる罪びと、取税人は天国ゆきとなった。イエスの鋭い人間批判と深いあわれみとをここに見る。このあとに

**「おのれを高うする者は卑（ひく）うされ、己れを卑うする者は高うせられる」**

という言もつけ加えられてある。勿論いわゆる低姿勢などというものではない。本当に平伏しの心、砕けのたましいとなることである。

実にあのパリサイ人の首魁であったパウロは、復活のキリストに霊撃されて以来、「律法の義」を、偽善を、かなぐりすてて、

**「われは罪びとの首（かしら）」**

と告白して、神、キリストの前に平伏し、キリストの義をめぐみとして信受したのであった。》

「取税人の祈り」を引用して小池辰雄は、今読んでもらったことを言うわけです。

「人間は誰の胸にも自己義認的パリサイ根性もあり、利己的な守銭奴的取税人根性もある。その他もろもろの罪の衝動が混在している。

これが真実の我々の姿ですよ。決してそんな潔いものではない。「パリサイ人」と言いますけれども、我々の姿がパリサイ人です。

要するに自我という慾心が罪で、この自我が砕けるか砕けないかにおいて、人類は最も根本的に二分されると思う。」

さっき読んだところを、ここで言っているわけです。そして綿々と言います、

「人種的差別、民族の相異、国家国籍のちがい、社会層の差異、主義、主張、思想、イデオロギーの対立、そういうものが天国か地獄かの相異にはならない。人間を本質的に天国か地獄かに分かつものは、その他、強弱でもなければ、貧富でもない。賢愚でもなければ、能不能でもない。美醜でもなければ、義不義でもない。聖俗、清濁でもなく、善悪ですらもない。

繰り返し繰り返しこれだけ言うわけです。

その人のたましいが砕けるか砕けないかだけである。」

「その人の魂が砕けるか砕けないかだけにかかっている」ということを言っている。それで

「パウロは、自分は罪びとの首（かしら）という自覚が生じた。」

「イエスの鋭い人間批判と深いあわれみとをここに見る。」

と書いてます。

**「おのれを高うする者は卑（ひく）うされ、己れを卑うする者は高うせられる」**

という。イエスという人も凄いですね。

「水を割らずにズケズケ言う」

と小池が書いてますけれども、本当にイエスというのは鋭い人間批判をします。しかし、その批判だけだったら、パリサイになるけれども、

「深い憐れみがある」

ということがイエスの凄いところです。もの凄い憐れみがある。

「深い深い憐れみがあるということをここでも見ますよ」

と小池は言っている。

「イエスの鋭い人間批判と深いあわれみとをここに見る。」

と。凄いですね、イエスという方は。僕はそう思いますよ、こういうのを読んでいると。

## ●キリストの砕け

次は194頁の「キリストの砕け」というところを最後に読んでいただきます。

**《キリストの砕け**

砕けるか砕けないか、天国か地獄か、人類を二分する最大の区別！　キリストは人間をそのどちらかに分ける。そして実は万人がこの砕けのたましいになることを本願しておられる。その本願のすがたが、砕けの極み、十字架のキリストなのである。そのことはキリストの「十字架」の項でつまびらかにしたが、端的にいえば、根源的には砕けきることのできない人間の罪を荷（にな）って、十字架で贖罪しているのがキリストの砕けなのである。だからパウロが告白した、

**「私はキリストと共に十字架された」（ガラテヤ2・20）**

と。それは

「私はキリストが私の自我というかたくなな罪を荷って、十字架の砕けをもって贖罪してくださったので、はじめて本当に砕かれた。こうしてキリストの砕けを賜わったので、私自身は現実にどうであろうと、根源的に砕かれて、自我から自由になった」

という意である。

砕けきれぬ「この罪びと私」のために、十字架のキリストが、砕けそのものを与えた。取税人の「われをあわれみ給え」のねがいは、十字架の贖罪のキリストにおいて聴かれているわけである。であるから、自分が砕けるか砕けないかということは、実は相対的判断であって、それはもはや問題でない。この「私」「自我」「罪びと私」は、あそこに、キリストの十字架に砕かれてあった、ということに気がつきさえすればよい。そこに砕けが与えられ、まことの平伏しとなり、罪から解放されている無者とされている。これが我々一人一人の告白となるまでは、真の砕けが根源現実とならない。キリストの砕けという恩恵の事実をわが根源現実として信受しつつ、つねに新たに相対的な我も砕かれてゆくというものである。このようなキリストのめぐみの玉砕を信受しつつ、めぐみの玉成へと進みゆくのである。》

これは、小池辰雄のこの「砕け」の最後の止めをさしたような言葉です。「キリストの砕け」という見出しでここにも書いてあるように、

「自分が砕けるか砕けないかということは、実は相対的判断であって、それはもはや問題でない。」

そうなんです。

「自分が砕けているかとか、砕けていないかとか」

というようなことは相対的なことなんです。自分をそういうふうに見ているだけで、それは相対的な判断です。絶対的な判断は、ここに書いてあるように、

「端的にいえは、根源的には砕けきることのできない人間の罪を荷って、十字架で贖罪しているのがキリストの砕けなのである。」

と。

「キリストの砕けをもらっている」

と、小池辰雄は言うんですよ。

「自分が砕けている」

とは言ってない。今まで読んできたように、放蕩息子の譬えでも、

「砕けた魂」

とか言ってますけれども、根本的には、あれが親父さんから別れて、そして愛された時に初めて神さまの砕けをもらっている。

「キリストの砕けを賜っている」

と言っている。「自分から砕けている」とは言ってない。砕けきれない自分、

「砕けきることのできない人間の罪を荷って、十字架で贖罪しているのがキリストの砕けなのである」

と書いてあるように、キリストの砕けをもらっている。

「私はキリストが私の自我というかたくなな罪を荷って、十字架の砕けをもって贖罪してくださったので、はじめて本当に砕かれた。」

と書いてある。これは小池の偽らない真情だと思う。

「はじめて本当に砕けかれた」

という。

「私はキリストが私の自我というかたくなな罪を荷って、十字架の砕けをもって贖罪してくださったので、はじめて本当に砕かれた。こうしてキリストの砕けを賜わったので、私自身は現実にどうであろうと、根源的に砕かれて、自我から自由になった」

解放されたという。小池辰雄が言うように、人間的にはやっぱり危機的存在ですよ。磁石の針がいつも動いているようにね。砕けをもらってもやっぱり動くんです。そういうのが人間の姿です。けれども、

「根源的にはもうお前はゆるした。お前はもう神さまの民になったんだ」

というのが、根源的な救いですよ。

**「もうお前は心配する必要がないんですよ」**

ということなんです。

「私はお前の罪を担って十字架にかかったんだ。そんなことは問題にする必要はないんですよ。相対的なことは問題にする必要はないんですよ」

と。それが

「キリストの砕けをもらう」

ということです。

「それに気がつきさえすればよい」

と書いてますでしょ。

「自分が砕けるか砕けないかということは、実は相対的判断であって、それはもはや問題ではない。……罪びと私はキリストの十字架に砕かれてあった、ということに気がつきさえすればよい。」

ということを小池は言うわけです。

「お前の罪をゆるした」

とか、よく言いますよね、十字架で。これは小池は、

「砕けをもらった」

という意味で

「贖罪された」

と言っている。本当に何回も言いますように、

「人類を二分するのは、砕けるか砕けないかの魂だ」

と言っている。砕けるのは、最終的には

「キリストの砕けをもらって初めて砕かれる」ということをここで最終的に言っている。

「十字架がなかったら、本当の砕けはもらっていないんですよ」ということを言っている。それを小池は「砕け」ということを言いながら、

「最終的には人間は砕け切れないから、十字架で砕けを賜ったんだ」ということを言うわけです。だから最後に、

「キリストの砕けという恩恵の事実をわが根源現実として

もう贖われた根源現実として、たとえどんなに動いてもということですね。

信受しつつ、つねに新たに相対的な我も砕かれてゆくというものである。

これは段々、砕かれていくんですよ。砕かれたということがあるとしても、「日々に新（あらた）なり」とパウロが言っているように、日々に成長していくんです。そのことを

我も砕かれてゆくというものである。

と。新たに砕かれていくということを、パウロも言うように、「日々に新たになっていく」というようなことをここで言っている。

このようなキリストのめぐみの玉砕を信受しつつ、

キリストの砕けを受けとりながら、

めぐみの玉成へと進みゆくのである。」

段々段々、キリストの姿に変えられていくということを、

「めぐみの玉成へと進みゆくのである」

というふうなことで言っている。小池の言葉というのは難しいですよ、「めぐみの玉成へと進みゆくのである」なんて。パウロなんかははっきり、

**「日々に新にされて、キリストの姿に変えられていく」**

と、分かりやすいですね。それをこんなふうに「めぐみの玉成へと進みゆくのである」なんて。こんな言葉を聞いても誰も分かりませんよ、と僕は思う。

けれども、小池の言わんとしていることは、ここで受けとってほしいなと思うんですよ。僕は小池辰雄のこういうものを読みながら、難しい言葉で表現しているけれども、やっぱり十字架の受けとり方とか、「砕け」そのものひとつとっても、本当に深い受けとり方をしているなと思う。

せっかく小池辰雄という人が現れて、神さまに愛されて、こういうご本を残された。そしたら、我々しか知りませんよ。小池に接している人というのは本当に少数なんです。

「これを分かりやすく皆さんに伝えていかないといけない、僕らは役目があるな」と思っている。そのときに、こういう難しい本を「読め」と渡しても、それは分かりませんわ。絶対に分からない。我々は――肩肘張らなくていいですよ、肩肘張ったらしんどいから――キリストからもらった喜びとか、恵みとか、それを素直に現していけさえすれば

いい。言葉は要りません。喜んでいる姿がやっぱり尊いですよ。

小池から学ぶことは、こんな難しい表現をする必要は全然ない。

「自分がどんなふうにして喜んで毎日を生きているか」

ということを言うだけでいいんです、言うだけで。

僕はさっきイースターの卵の話をしましたけれども、僕は喜んでいるから、これを人にあげたいと思う。きれいな卵だしね。そういうことでいいと思うんですよ。その時に、

「教会とはこんな面白いことをするんですよ」

とか言って上げるだけで、キリストの話は一切しません。そんなことをすぐしても伝わらないからね。けれども、そういうきれいな卵をもらうと、気持ちがちょっと変わるかもしれません。そういうことがあって、肩肘張らないで、喜んでいる姿を皆さんに見てほしいなと思う。

絶対に難しいことではない。難しかったら、誰も入れませんよ。キリストの世界に、天国に入れるのは幼児ですよ。難しいことを考え過ぎたらダメです。小池は難しい言葉を使いますよ、本当に難しい言葉を使います。

「平伏し（ひれふし）」

という言葉を使って、

「平伏して毎日行くんですよ」

とか、そんなことを言われても、ちょっと分かりにくいですよね、「平伏し」ひとつ取ってみても。そうじゃなくて、

「子どものように生きたらいいんですよ」

というようなことですよ、言ってみたら。お母さんのところに子どもが、呼べばとんでくる、そういう姿なんです。それを小池は言っているんですよ。言っているけれども、難しい言葉に振り回されて、そういう言葉が入ってこないんです。

「もう赤ちゃんと同じように生きたらいいんだ」

というようなことを小池辰雄も本当は願っているんだと思うけれども、明治の人ですから、ちょっと難しい言葉を使う。これは立派な本だけれども、読んでくれる人がいないと思いますよ。

そういうことで、今日はこの辺で終わります。

……

●質疑応答

なにか質問ありますか。

（質問者）

さきほど、

「ただ神さまの存在を信じるか信じないかで二分される」というようなことを強調された思いますが、そうすると、ユダヤの人たちは実によく神さまの存在を信じているわけですが、ただそのあと、イエスさまが現れて、「砕け」ということを受け入れてないということなんですが。ユダヤ人というのは世界で脈々と、ある意味で活躍していると思いますが、それをどういうふうに先生は解釈しておられますか？

（応答）

今言われたユダヤ人というのは旧約時代の信仰をずっと持っている。新約時代はキリストが来られて、その信仰の質がちがうんです。旧約時代の信仰は、モーセに律法が与えられました。ヨハネ伝1章17節に、

**「律法はモーセを通して与えられたが、恩恵と真理はイエス・キリストを通して現れた」**

という言葉があります。旧約時代は、律法を遵守することが信仰だと思っていた。律法をまじめにやっていくことが信仰と捉えていた。神さまの命令ですから、それを誠実に果していったら、それは信仰者となりますよ。だから、パリサイ人たちは、一点一画もおろそかにせんように従おうとした。けれども、そんなことは人間にはではない。そして、キリストが来られて、十字架にかかられて、パウロが

「それは違うんだ。新しい信仰が生まれたんだ」

と言う。それは

「行為によるのではない。無条件にキリストの信仰によるんだ」

ということを言っている。そのことをここで言っている。恵みと真はイエス・キリストを通して与えられた。それまでは律法を遵守することが信仰だった。それは人間にはできないことなんだ。砕け切れないと言っているように、パウロは無茶苦茶に律法については責めるところがないほど頑張っていたわけです。けれども、

「そういうことでないんですよ。そういう行為では人間は百％に神に近づくことはできない。人間の力ではできない。だから、キリストが来られたんですよ」

というのが、新約時代に信仰の質が変わってしまった。そのことを今、仰ったんですか、違いますか。今の質問はそういうことだったんでしょ、質問の中味は。

（質問者）

最初はあまりにも、「信じるか、信仰がないかが二分するんですよ」ということを言われて……

（応答）

「信じるか」ではなくて、

「砕けるか砕けないか」

です。「信じるか信じないか」ではないんです。神さまのことは、旧約時代もよく知っているんです、彼らは。けれども、信仰の質がちがう。彼らは自分から人間の力で神さまに近づこうとしたのが旧約時代の信仰です。それはしんどいですよ。自分の方から何かしようとしたら。けれども、そんなことは関係ないんですよといって、キリストが十字架にかかられた。人間には、そんな神さまの要求を全部百％満たせることができるような人間は一人もいない。それがパウロの主張です。

**「善人は一人もいない」**

というようなことを言っているように。これは人間の力では神さまの所に近づけない。そのことを質問なさったことの内容かと思ったんですけれども。

（質問者）

今、世界の歴史の中でユダヤ人たちのことを私たちは、小池先生の考えでは、ある意味で「おかしい」ということですよね。受け入れないんだから。

（応答）

ユダヤ人たちはキリストを受け入れませんね。

（質問者）

そういう受けとり方でいいですかという質問です。ユダヤ教というのはそういうものでないかなと、私は思ってます。そう思っているけれども、違うんですか。受け入れているんですか。

（応答）

ユダヤ人はまだ旧約時代のままですよね。いや、受け入れていないです。キリストを受け入れていないと思います。受け入れている人もいるかも知れないけれども、僕はユダヤ人のことはよく知りません。旧約時代の信仰と、キリストの来られた信仰との質が変わったということだけ、このヨハネ伝の最初の言葉でいうとそうですね。

**「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真はイエス・キリストを通して現れた」**

ということですね。だから、全然信仰の質が、旧約時代と現在とは違うんです。